

〔研究ノート〕

蕪村の富士図について — 実景と俳力 —

正岡子規が蕪村の俳句の裡に写生精神を見出し、それを強く奨揚したことはよく知られている処ですが、そう思いながら、数ある蕪村画を見わたしますと、大変不思議なことに気がきます。と言うのは、蕪村の描いた絵の中に、眼の前の風景や物が見えるがままに描いたものが全くと言っていい程ないからです。

例えば、ここに掲げた富士の絵は蕪村晩年の作品で、数少い彼の实景図の一つと見做されているものですが、ではこの絵が富士山を客観的に写生したものかと言いますと、その描法から見て、とてもそうとは言えないのです。白一色の富士の姿は細部が全く描かれずに単純化されていますし、薄墨を一面に刷いた空は夜空とも雪空とも見えますが、夜にこれ程はっきりと松の葉が見える訳がなく、また雪空に富士の頂きが見える筈もありません。無骨な大きな手を差上げたような松葉の群と立ち並ぶたくましい松の幹、ここにも写生の匂いは全くありません。

このような問題を考えるうえで、今まであまり取上げられなかった蕪村の言葉の中に、次のような興味深い一節があります。

—— 湖の汀すみけり秋の水

よき句なれど、俳諧の流行只洒落にけしきの句のみに成ゆきて俳力日々薄く成るのなげかはしければ是等の句はおのおの撰をもらし侍る——（句評）

—— 三尺の鯉くぐりけり柳影

三尺の鯉の句、眼前之実景にて真卒ナル句ニ候へども、是ハさのミ作者の粉骨も見えぬ句にて、不用意の句にて候。あしき句にてハなく候へども、骨を折たる作者の意（こころ）を失ひ候。

（十月廿三日付 白桃宛手紙）

子規ならば、二句とも絵画的な写生の句として高く評価したに違いありませんが、当の蕪村は「洒落な景色の句」として一応の評価を与えつつも、作者の工夫が足りないことに不満を述べております。これを見ると、蕪村としては、単に「眼前の実景」を「不用意」に捉えることには、さして興味を持っていなかったように思われます。それよりも蕪村の関心は、対象の捉え方の裡に作者自身の苦心を交えること、つまり何如に「俳力」を働かせるかということにあったと言えましょう。

振返って見れば、蕪村の富士の絵にしても、その奇妙に思えた処にこそ、実は彼の苦心の跡があると考えられるのではないのでしょうか。それまで誰もこのような大胆な構図の富士を描いたことはありませんでしたし、また空一面の墨によって、雪の富士の印象をこれ程あざやかに表わした者もいませんでした。更に見様によれば、空に挺（ぬき）ん出た無垢なる富士の姿とその下に群がる野性的な松林との対峙は、まことに不思議な世界を現出させていると言えます。

蕪村の言う「俳力」とは、もの

に囚われぬ眼で新しい世界、新しい人生を発見することであり、それは俳諧だけでなく、彼の絵にも働いていたと言えましょう。（早川聞多）



紙本淡彩 29・6×138センチ
与謝蕪村筆 松林富士図（部分）

季刊 美のたより No.60

昭和57年 8月12日

発行 大和文華館